

五十二位の菩薩階位説の成立について

水 野 莊 平

一 問題の所在

中国仏教独自の菩薩階位説は、五世紀半ばから後半に撰述された『仁王般若経』『梵網経』『菩薩瓔珞本業経』の説が嚆矢と考えられる。即ち、『仁王般若経』や『梵網経』では「三種性（三十心）」と『華嚴経』系の十地説とを併せた構造を持つ階位説が説かれ、『菩薩瓔珞本業経』ではこれらの説を整理した上で『華嚴経』に出る用語に置き換えられて、十住・十行・十廻向・十地・等覺・妙覺の四十二位がたてられている。この『菩薩瓔珞本業経』の四十二位説は隋代に天台智顗によって十信を含めた五十二位説として採用され、現在に至るまで最も有力な菩薩階位説として定着している。

このような『菩薩瓔珞本業経』の階位説が天台智顗によって五十二位説として採り上げられるに至る過程での問題となるべき点は、特に次の二点が挙げられる。

一つは、そもそも『菩薩瓔珞本業経』は、今では五十二位

の菩薩階位を説く經典として知られているものの、實際經典本文には「五十二位」という用語は一例も出ず、むしろ「四十二賢聖」などとして四十二位を強調しており、少なくとも『菩薩瓔珞本業経』の編者が、菩薩の階位として五十二位ではなく四十二位を意識していたことは明白であることである。つまり、本来は四十二位であるべき『菩薩瓔珞本業経』の菩薩階位説がいつ五十二位として解釈されるようになったのか、疑問がもたれる。

二つには、菩薩階位を説く經典は数多ある中で、なぜ智顗は『菩薩瓔珞本業経』の階位説を採り上げたのかという点である。これは勿論、智顗の師・南岳慧思の説を受け継いでいることに起因するであろうが、それならば慧思はなぜ『菩薩瓔珞本業経』の階位説を採り上げたのか、疑問がもたれる。

従って本章では、『菩薩瓔珞本業経』がいかに慧思によって見出されたのか、更にはその階位説がどのように智顗によって五十二位説として大成されたのかを検討したい。

五十二位の菩薩階位説の成立について（水野）

二〇四

二 南岳慧思の菩薩階位説

五十二位の菩薩階位説を確立した天台智顗は、陳の天嘉元年（五六〇）頃から南岳慧思（五一五～五七七）に師事しており、智顗の特に前期時代の著作は般若の空觀に根底をおく慧思教学が基盤となっている。本節ではこの智顗の説の基盤となつた慧思の菩薩階位説について、確認しておきたい。

慧思がいかなる階位説を採用していたかについては、先ず慧思の代表的著作である『立誓願文』の帰敬の言に四十二地という語が見え、また同じく『立誓願文』の發願以後の心境を述べた五言偈の中に「等覺地・妙覺」の語が見えることから、慧思が菩薩階位説として『菩薩瓔珞本業經』の四十二位説を採用していたことは疑いがない。

さて、ならば慧思が当時数多く流布していた菩薩階位説の中から何故『菩薩瓔珞本業經』の四十二位説を採用したのか疑問が呈せられるが、これは慧思の著作の一つである『四十二字門』を検討することによって明らかとなる。

四十二字門とは梵字悉曇の四十二の字母に一定の意味が与えられ論じられたもので、例えば『大品般若經』卷五の広乗品には、阿（a）から始まる四十二字に対してそれぞれ字義が詳細に述べられている。慧思の『四十二字門』は、この『大品般若經』の四十二字門を『菩薩瓔珞本業經』の四十二位に

よって解釈したものである。そして慧思の『四十二字門』には更に『菩薩瓔珞本業經』の賢聖學觀品からその説示される内容順に相当量の引用があることから、慧思は四十二字を菩薩の階位と見なし、『四十二字門』においてそれぞれの階位の詳細を示すために『菩薩瓔珞本業經』の賢聖學觀品のほぼ全文を引用していたと推測される。従つて、慧思は四十二字門と相当させ得る四十二位の菩薩階位を説く經典として、明瞭詳細に四十二位の階位を説く『菩薩瓔珞本業經』を採用したものと考えられる。

さてここで問題とされるべきは、なぜ慧思はこの四十二字門を、菩薩階位と相当させ『四十二字門』として注釈書を著すほどに重要視したのか、である。

そもそも慧思は『大智度論』の所説に従つて、特に『法華經』と『般若經』の両經を最重要視していたことが知られるが、とりわけ実践法としては、『大品般若經』とそれを注釈した『大智度論』を以つて、インド以来実践されてきた大小乗の諸禪法を統一して具体的に体系づけようとした。そして『大品般若經』のなかで、菩薩摩訶薩の実踐道として繰り返し説示されているのが、四念處から十八不共法までの種々の禪觀である。

『大品般若經』ではこの四念處から十八不共法までの種々の禪觀が、「四念處乃至十八不共法」などの表現で、菩薩の種々

の禪觀の総称として極めて頻繁に使用されているが、具体的内容については目名のみを説示するに留まる場合がほとんどである。しかし第十九の広乗品においては、品全体が四念処から十八不共法までの種々の禪觀の具体的内容を説示することに充てられている。

広乗品で説示される禪觀は「四念処・四正勤・四如意分・五根・五力・七覺分・八聖道分・三三昧（三解脱門）・十一智・三根・三三昧・十念・四禪・四無量心・四無色定・八背捨・九次第定・十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法」で、最後に四十二字門が説かれる。目名によって記述の程度に差があるとはいえ、「四念処乃至十八不共法」の内容について『大品般若経』のなかで最も体系的に詳細に説示されているのは、この広乗品である。そして広乗品において「四念処乃至十八不共法」のそれぞれが明かされた後で、最後に説示されるのが四十二字門である。広乗品のみを読めばそこには四念処から四十二字門までの禪觀が説示されているように見えるが、序品から広乗品に至るまでには、禪觀の総称として「四念処乃至十八不共法」という表現が頻出しているのであるから、『大品般若経』を通読している者には、四十二字門の記述は十八不共法に続く禪觀の一種というよりも、四念処から十八不共法までの禪觀の総結のようなものとして捉えられたであろう。

『大品般若経』に説く一連の禪觀の総結としての意味を持つならば、諸禪觀を具体的に体系づけようとした慧思が、注釈書を著すほどの四十二字門を重要視したことは、容易に首肯される。『菩薩瓔珞本業経』の四十二位の菩薩階位説は六世紀初頭以降に広く流布していたと考えられるから、『大品般若経』広乗品に説く諸禪觀の総結としての四十二字門に着目した慧思が、『菩薩瓔珞本業経』の四十二位の菩薩階位説を連想し相当させたこともまた、容易に推察されるのである。

三 天台智顗の菩薩階位説

天台智顗（五三八～五九七）の著述において、慧思の四十二位説を踏まえた階位説が説示されるのは、『六妙法門』が最初である。『六妙法門』では、第十証相六妙門において、別教の円頓証の証相が、相似証相と眞実証相とに類別され、相似証相には六根清淨相が当てられ、眞実証相は更に別対と通対とに類別され、別対と通対それぞれに十住・十行・十廻向・十地・等覺・妙覺が充てられている。そして通対においてはまた更に初証・中証・究竟証が設けられ、十住のうちの第一の初發心住を初証に、その他の九住と十行・十廻向・十地・等覺を中証に、そして妙覺を究竟位に当てている。この『六妙法門』第十証相六妙門では、例えば通対の初証・中証・究

竟証を説いて、「初証とは、菩薩ありて阿字門に入るも、また初発心住と名づけ」「後心の菩薩は茶（茶）字門に入り」（大正四六、五五五上）とあるように四十二位を四十二字に配当させている。また『六妙法門』講説の要請主である毛喜が天台山隠棲後の智顗に送った書状に「四十二字門令附。雖留多時読竟不解。」（大正四六、八〇一中）とあることから、智顗は『六妙法門』講説時に慧思の『四十二字門』を知っていて、『六妙法門』において『菩薩瓔珞本業經』の四十二位説を採用しているのは慧思の『四十二字門』の影響であることは疑いがない。逆に言えば、智顗の最初期の著作であり光大二年（五六八）から大建七年（五七五）まで講説をまとめたものとされる『次第禪門』では『菩薩瓔珞本業經』の四十二位説が全く採用されていないから、慧思が『四十二字門』を著したのは智顗が『六妙法門』の第十証相六妙門を講説するに先んじ『次第禪門』を講説した後と考えられる。即ち、『四十二字門』は慧思の最晩年の著作であると推測される。

なお、『六妙法門』第十証相六妙門では、四十二位を配当させる真実証相に対する相似証相を『法華經』にいう六根清浄を当てて六根清浄位とし、また真実証相の通対においても十住の第一の初発心住のみを四十二位から切り離して初証に当てるなど、つまりは四十二位全体を格別の聖位とし、その為に四十二位以前に何らかの階位を想定して、四十二位自体

に至るまでの道筋をつけようとする意図が見て取れる。

次に、智顗の著作の中で後期時代に説かれるような、四十二位の前に十信を置く五十二位説が最初に確認されるのが、『覺意三昧』である。『覺意三昧』の講述時期は明確ではないが、後期時代の著作で説かれる五時四教の教判や三諦三觀の思想が見られないことから、五十二位説が最初に説かれた、智顗の前期時代と後期時代の過渡期的著作であるといえる。

『覺意三昧』では菩薩の階位について、第六の証相門章において説示している。即ち、先ず外凡を鉄輪菩薩として『菩薩瓔珞本業經』に説かれる十信を相当させ、内凡を銅輪菩薩として十住の第一の初発心住を充て、以降については、「其余九住及十行。十金剛十地等覺妙覺。是諸仏境界。是菩薩所知。豈是凡識之所能量。」（大正四六、六二七中）とあって、詳らかに説かれていない。とにかく『覺意三昧』第六証相門章では、一連の菩薩階位の中でも最初の十信について『菩薩瓔珞本業經』に基づきその一々について詳説しており、新たに採用された階位である十信について説き明かす事に主眼が置かれていたことが分かる。

さて、このように智顗は四十二位を格別の聖位とし、『菩薩瓔珞本業經』を再解釈して四十二位の前に十信をおいて四十二位に至るまでの道筋をつけ、全体で五十二位としたわ

けであるが、そもそも智顗はなぜ『六妙法門』にも見られたように、四十二位を格別の聖位とし、そこにいたる道筋をつけることに拘ったのか、疑問がもたれる。これについては地論宗の影響や、師である慧思が自らの位を十信鉄輪位に過ぎないと語っていることなどが要因として推察される。また、智顗の伝記を省みると、『次第禪門』の講説が終わったのち『覺意三昧』が講述されるまでの時期というのは、智顗が金陵の瓦官寺にあつて数多の門人に経論の講義と坐禪の指導をするも、得法する者の数が極めて少ないことに絶望し、天台山に隠棲する時期と重なっている。従つて、実際の修行者には菩薩の位はその最初の段階でさえ遙かに遠く隔たつていることを痛感した智顗が、『菩薩瓔珞本業經』を再度読み解いて十信を見出し、四十二位までの道筋をつけようとしたものと考えられることもできる。

なお、『覺意三昧』においては『六妙法門』における六根・清淨相に相当する階位は説かれておらず、また十信を外凡、十住の第一の初發心住を内凡とし、以降の九住・十行・十金剛（十廻向）・十地・等覺・妙覺は詳説されなかった。智顗の後期時代の著作に至つて、別教の階位として十信から妙覺までの『菩薩瓔珞本業經』に基づく五十二位がたてられ、円教ではこの五十二位を踏襲しながら更に『法華經』の分別功德品に基づいた五品弟子位が立てられてこれが外凡とされ、十

信が内凡、十住・十行・十廻向・十地・等覺・妙覺は聖位とされる、智顗独自の一連の菩薩階位説が完成し、これが後世まで最も有力な階位説として定着するのである。

四 結論

以上、『菩薩瓔珞本業經』の階位説が天台智顗によって五十二位説として採り上げられるに至る過程を検討した。先ず、なぜ慧思は『菩薩瓔珞本業經』の四十二位説を採り上げたのか、という点については、

一、インド以来実践されてきた諸禪法を具体的に体系づけようとしていた南岳慧思は、『四十二字門』を著すなど、『大品般若經』広乗品に説かれる四十二字門を特に重要視した。これは『大品般若經』の四十二字門の記述を、四念処から十八不共法までの禪觀、即ち『大品般若經』の禪觀の総結のようなものとして捉えたからである。

二、慧思は、諸禪觀の総結としての四十二字門と相当させるために、当時広く知られ、かつ明瞭詳細に四十二位の階位を説く『菩薩瓔珞本業經』を採用して、自身の菩薩階位説とした。

という二点が明らかとなった。次に慧思に採用された『菩薩瓔珞本業經』の四十二位説が、智顗によつていつどのようになり、五十二位説として解釈されたのか、という点については、

五十二位の菩薩階位説の成立について（水野）

二〇八

一、天台智顗の著述において、慧思の四十二位説を踏まえた階位説が説示されるのは、『六妙法門』が最初である。

二、智顗の初期の著作である『次第禪門』では『菩薩瓔珞本業經』の四十二位説が全く採用されていないから、慧思が『四十二字門』を著したのは智顗が『六妙法門』を講説するに先んじ『次第禪門』を講説した後と考えられ、『四十二字門』は慧思の最晩年の著作であると推測される。

三、智顗の著作の中で、四十二位の前に十信を置く五十二位説が最初に確認されるのは『覺意三昧』である。

四、『覺意三昧』では、最初の十信について『菩薩瓔珞本業經』に基づきその一々について詳説しており、四十二位に至るために新たに採用された階位である十信について説き明かす事に主眼が置かれていた。

五、智顗が四十二位を格別の聖位とし、『菩薩瓔珞本業經』を再解釈して四十二位の前に十信をおいて五十二位とし、更には十信の前に『法華經』の分別功德品に基づいた五品弟子位をたて、四十二位に至るまでの道筋をつけようとしたのは、地論宗の影響や慧思自身の行位に加え、現実の修行者にとって菩薩の位は遠く隔たっていることを痛感した金陵の瓦官寺時代の経験が遠因となまっていることが推測される。

という以上の点が明らかになった。

これらの結論と共に、そもそも『菩薩瓔珞本業經』の階位説が『華嚴經』の所説と名称を全面的に取り入れていることを考え合わせると、『菩薩瓔珞本業經』の階位説が基盤となつて、慧思が四十二字門と相当させることにより『般若經』と融合し、智顗が十信を取り入れ五十二位とした上で別教と円教、更には五品弟子位が立てられたことにより『法華經』とも融合したのである。

『華嚴經』『般若經』『法華經』という、大乘經典を代表する三經が包含されているという点において、智顗の確立した五十二位の菩薩階位説は他説の追隨を許さず、後世、最も有力な階位説として定着したことも容易に首肯されるのである。

（註略）

〈キーワード〉 菩薩階位、慧思、『四十二字門』、智顗、『六妙法門』、

『覺意三昧』

（愛知学院大学大学院研究員）